

編集後記

杉仁さんが亡くなられて、もう一年になるうとして、追悼特集を予告して、原稿が集まらず、今号でもできずにいる。力不足をお詫びする次第である。

実をいうと、追悼といっても、実感がわかない。

私事ながら、北海道に赴任して、この書物研究会にはあまり出席できなくなつた。だから、私の記憶は、毎回のようになつた。杉さんが出席されていた研究会の雰囲気のままである。

昨年夏、北海道伊達大会が開かれた。久しぶりの研究会への出席となつたが、杉さんがいないのが不思議な感じがした。例の帽子を被つて、ひよっこりと現れるのではないか……。

杉さんの最初の著作『近世の地域と在村文化』（吉川弘文館）が刊行されたのは、二〇〇一年で六七歳であった。早稲田実業で教鞭をとりながらの研究で、ご自身は「晩学・遅筆」という。驚くべきこと



2011年10月1日、67回信州松本大会での巡検。
鈴木俊幸氏の説明を熱心に聴く、杉さん。

は、その処女作で「在村文化」研究というジャンルを確立したことである。

この研究会が発足した年、杉さんは七〇歳になられたはずだ。それ以降のおつきあいでは、晩年のことになる。しかし、杉さんのフィールドワークは、到底、七〇歳とはおもわれない精力的なもので、地域に密着し、広く史料を渉猟されておられ、ますます盛んになっていった。

次著『近世の在村文化と書物出版』（吉川弘文館二〇〇九）では、さらに、研究を進め、徳川賞を受賞された。古稀を越えて、研究が満面開花し、学問が進化する

ことを目の当たりにし、私は、驚嘆を覚え、自らを省みて、その研究の貧寒さと行動力のなさに恥ずかしさを覚えた。

「三・一一」には大きな衝撃をうけられ、被災地を訪れて、「天災と人災を考える」（本誌一一号）を執筆された。あらたな歴史学の可能性を模索されているようにみえた。

杉さんのご報告は二時間半以上、他の研究者報告の質疑応答では、何度も手をあげ質問された。また、研究会恒例の自己紹介では、いつも刺激的な情報を話されていた。「私はこの研究会が一番、愉しんでいますよ」。その愉しさが伝わってくる話し方であった。

二〇一二年一月二十七日、私は翌日の関西大会に備え大阪にいた。杉さんは上田温泉にいたので、関西大会には参加できないとおっしゃっていた。「明日お会いできないのか」とほんやり考えていたが、その日、杉さんは亡くなった。もうあの声を聞くことができない。

（小川記）